
王様の鷹の話

立田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様の鷹の話

【Nコード】

N1868Q

【作者名】

立田

【あらすじ】

彼女の左の薬指がない理由。彼が卵を見ると盗む理由。それから、彼女が牡蠣を食べると真珠を見つける理由。それは、むかしむかしあるところに王様と世継ぎの王子様、そして魔女がいたから――。現実とお伽噺が混じりあう短編オムニバス。

アンソロジー『もしそば』（<http://indigo.opal.ne.jp/anthology/>）に、魔女と先代の王の話「魔女と豆を食べる王の話」で参加させて頂きました（上記サイト

。から通販も可能です）（Web再録は発行から約1年後の予定です）

王様の鷹の話

「君は左の薬指が無いんだね」

「そうなのよ。今気付いたの？」

そりゃ昨日会ったばかりで、しかも君昨夜は手袋をしていたし、その後意気投合した勢いに任せて薄暗い中でベッドインしちゃったからだよ、とはたとえそれが真実であっても言いづらいものがある。朝起きた時、微かに痛む頭を抱えつつここはどこだろうと手がかりを探したら、隣で彼女がまだ眠っていた。

それはかなり嬉しいことだったし、彼女の安らかな寝顔を見たと同時に自分は誰かもここはどこかもしれないと解したのだが、彼女の顔の隣にあった左手には指が一本欠けていたと、まあそんなわけだ。

どうやらすぱっと切れた訳では無いらしい、と彼の知識は結論づけている。

今は肉が再生して傷痕は滑らかになっているけれども、怪我した当時は、それはもうスプラッタのぐちゃぐちゃだったんだろうなあ、とまだ覚めきっていない頭で考えていた。

きつと痛かったことだろう。

そして話は冒頭の会話にさかのぼる。

「どうしてか話してあげましょうか？」

あまりにじつと見つめられたせいで、くすぐったくなったのか、左手を引っ込めながら彼女が言った。

「あー別に話したくないならいいよ」

「聞きたいなら聞きたいって言え」

「……ごめんなさい聞きたいです」

降参すると、彼女は軽く頭を振って眠気を払い、おもむろに厳粛な口調で話しはじめた。

「むかしむかしあるところに王様がいました。」

「はい!？」

王様は文武に優れた方として大陸中に御名を響き渡らせておいででしたが、また魔法使いとしての腕も世界で一二を争うほどでおられました。

ご統治の下で王国は豊かに平和で、国民は健やかに満ち足りた生活を送っております。

もしも王様に、いや王国に問題があるとすれば、それはたった一つ王様が未だお妃さまを娶られていないということであつたでしょう。王様は大変見目の麗しい方でしたから、近隣諸国の王女様方の中には、王様とのご結婚を夢見て日々を過ごしておられる方も大変多かったのですが、王様と言えば、大臣たちがご結婚の話を持ち出すたびに、ぷいとそっぽを向くと狩りへ出掛けておしまいになるのです。

狩りといえば、王様はいつも一羽の鷹を連れておられました。

王様がまだ王子であらせられたころ、ご自身で捕らえられたその

鷹は畜生の類とはいえ、大層美しい鳥でした。あるお側仕えの小姓などは、あの鷹からは魔法の気配がする、などと、もってもらしく触れ回っていたものでございます。

それはまあ、ただの言いがかりとしましても、確かに鷹が小首を傾げて王様の命を聴いているときなどは、まるで知性を持っているようにも見えたものです。

王様は鷹を何よりも、それこそ家来の誰よりも可愛がっておいででした。

一人の小姓が——そういえばあれは例の、鷹には魔法が掛かっているうんぬんかんぬんと五月蠅かった奴だったような気が致しますが——悪ふざけに鷹の尾羽を一本抜いてしまった時など、珍しいほど激昂なさつて、言い訳をする暇も与えず、ご自身自らがお手打ちになさったほどでございます。

そんなある日のことです、それまで誰も見たことがない商人が、珍しい異国の品々を駱駝に積んでお城にやってまいりました。手の込んだ細工物に貴重な香辛料、美しい織物などを玉座の前の床に一杯に広げては、面白可笑しく品々のいわれを申し立てます。興がのられたのか、王様は一つ一つ品物を指差しては商人に説明させておいででしたが、ある古ぼけた巻物をご覧になった時、お顔をさつと変えられました。

王様の驚かれたご様子に気付き、我が意を得たりと効能を述べ立てる商人を手の一振りで遮ると、その巻物を商人の言い値の倍額でお買い上げになったのです。その後、王様はご書斎にお籠りになつてしまい、二日三晩の間飲食も忘れられ、寝る間も惜しまれ何かをお調べになつておられました。

三日目の朝、ようやく出てこられた王様は、朝食をお召し上がりになるとすぐに大臣たちを集められました。大臣たちが突然のお

呼びに戸惑っておりますうちに、王様は晴れやかにご結婚するご意志を固められたことをお告げになりました。

一度は喜色満面となった大臣たちですが、王様が御相手を明らかにされた時、彼らの表情は一瞬にして困惑へと変わりました。

何と、王様が、ご結婚相手としてお選びになったのは、あの鷹だったのです。

なんでも、この度お買い上げになった古文書は、古代に禁じられた呪文を書き記したもので、その中の一つに獣を人へと変身させるものがあるとおっしゃるのです。

それは世の理に反する、国の威信に関わるなどと、大臣たちは口々に反対申し上げたのですが、ご決心は固いままで。とうとう王様は鷹を連れて、魔術を行うために塔へ入って行かれておしまいになったのです。

慣れない処に入ったからでしょうか、鷹は常日頃からは想像も付かないほど暴れて、王様の御手から逃れようといたします。仕方なく王様はお召しになっていた金鎖にまじないをかけると、それで鷹の爪を戒め、窓格子に結び付けられると、隣室の祭壇の前にて魔法陣の準備をすることになりました。

けれども、魔法陣が完成し、王様が戻っていらした時、鷹は何処にも見当たらなかったのです。

残されていたのは、ただ血まみれの爪が一本と、それにまだ繋がったままの鎖と、蝶番が壊れ開いた窓のみ。血痕はぼつぽつと窓の外へと続いて、それから途切れておりました。

それから王様が彼の鷹に巡り合うことは無かったということです。

「あーコーヒー飲みたい」

「ん、ああ煎れようか」

んーお願いーと言いつつ、彼女は皺のついたシーツの上で大きく伸びをした。

そうやってしていると鷹というより猫だと思う。

……本当の話が解らないけれど。騙されているだけかもしれないけれど。

あんたとは長くお付きあいする気は無いつていう意思表示かもしれないし。

何しろ結婚指輪を嵌めるところも無いし。
目覚めた時とはまた別の意味で頭が痛い。

しかし逃げられるわけにはいかないのだ。

逃げられたら世界の果てまで追っていきそうな自分が居る。

……それもまた実にファンタジーな話だが。

彼が思考を渦巻かせながら寝室から出ようとしたところで、呼び止められた。

振り返ると笑顔で一声。

「大丈夫よ、今は貴方の側に居るから」

泥棒と卵の話

僕は、卵を見ると、盗みたくなる。

それに気がついたのは思春期真っ盛りの高校生のころで、僕は家から結構遠いレストランでウェイターをしていた。バイトの理由はバイクが買いたいたとか、そんなものだったと思う。ちなみにバイトもバイクも校則でしっかりきっぱり禁止されていた。しかし僕にとって問題だったのはそんなことではなくて、その地下の厨房から駐車場に面した従業員出口へ続く中途半端な階段の片隅に、いつも業務用の卵のカートンが山のように積んであったことだった。

僕は帰りがけに、いつも卵をそこから一個盗んでいたのだ。

どうしてなのかは分からない。僕はたいして卵料理が好きというわけでもないし、金欠からなる食物不足で困っていたというわけでもない。けれど、いくら目を逸らしつつ早足で階段を上ることを心がけても、積み重ねられたカートンの頂上で縦十列×横十列と整然と並んだ白い卵の群れからは、僕が通ったあと、必ず一個分の穴が空いていた。そして僕は急いでタイムカードを押して外に飛び出すと、いつのまにかポケットに入れた生卵を壊さないかとひやひやつつ、罪悪感のなか家に向かうのだった。

結局、僕は自分には病的な盗癖があるのではないかと医学書やなんかを調べまくった。けれど、発作的に卵だけを盗むという強迫症は他に見当たらず、毎晩卵を内密に処理するのに、食べるということとで協力してくれていた犬のタ口は体重を増やし、僕はどうして自分がそんな行動をとるのか分からないまま、そのバイトを辞めた。

最後の日に貰った給料から抜き取った千円札をカートンの間に挟んだのは、せめてもの償いのつもりだった。

もちろん勤務期間の短さから言ってお金はあまり貯まらなかった。ただ一つ良い事があったとすれば、それは毎晩の生卵のせいで、タ口の毛並みが今までになく艶々と美しくなったことだった。

そんなわけで、僕はレンタルビデオ屋にバイト替えし、一浪して大学に入って卒業して運良く社会人になった。言ってみれば、僕の人生なんてこのこと以外は平々凡々なものなのだ。そして僕はそれに何の不満もない。

それなのに、ああそれなのにそれなのに。

あと少して日付も変わる木曜日の夜、僕はアパートの廊下に立ち尽くして、背広のポケットに突っ込んだ右手で少しざらりとした楕円形を感じながら、深く深く溜息をついた。

いくら一人で冷たく暗い部屋に帰りたくないからって、疲れているから酒が飲みたいからって、そして新しく駅前に出来た二十四時間営業スーパーがいくら開店セール中だからって、寄ることはなかったのだ。だっていつものように卵売り場を避けて通ることが出来ないのだから。

気が付いたときには、目の前に『鈴木さんちのうみたて卵』という手書きのボードと、その下の朶に半ば埋もれた卵が数十個あった。夢遊病者のように、そのうちの一個に躊躇いもなく手を伸ばし、ポケットに入れてしまっていた。そんなことをしてから、誰も見ていなかったどうか慌ててあたりを見回して、運良く見つかったいなとわかると要りもしないトレットペーパー12ロールをひっつかんで会計を済ませ、今に至るというわけだ。目的だった酒も買い忘れた。

そのうち万引きで捕まるんじゃないだろうか。病院に行ったほうがいいかもしれない。

そしてごめんなさい鈴木さん。

「ここらへんに精神科なんてあったっけか……？」

のろのろと鍵を探し出して、溜息をまた吐き出しながらアパートのドアを開けた。靴を脱ぎ捨てて、手探りで照明のスイッチを探る。ポケットの中の卵が震えたのはそんな時だ。

携帯じゃない。

そんなことを思っ、慌てて手の中の卵をテーブルの上に出した。そうしてから勢いで殻が割れたかと心配になって確認したが、蛍光灯の白い明かりを受けて、横向きになった卵は滑らかな影を下に落としている。それがくると回転したかと思うと、こちらを向いた。いや、卵に顔や目鼻がついているわけではないので、そういう風に見えた、というのが正しい。

次の瞬間、おや、と年老いた女性の声が聞こえた。

「明日まで隠れ家があると思ったら、こんなところでお前と会うとはねえ」

やっぱり病院に行こう。

僕は明日一番に近所の総合病院に行くことを決意した。

しかし、もし卵から聞こえてくるのでさえなければ、その声はいっそ安心感を与えてくれるものだったかもしれない。遙か遠くの遺跡を吹き過ぎる風のように乾いていて、どこかしら懐かしい響きがあった。

「ああお前はまったく憶えていないのだね」

ずっと忘れたままであるというのも酷な話かもしれないね。何もわからずに卵ばかり盗んでいるのだろうか？

呆気にとられている僕には構わず、卵はゆったりとそう言った。

鈴木さんちのうみたて卵、がだ。しかも関係はないが特々サイズだ。認めたくはなかったのだが、僕のアパートでは他にラジオもテレビも付いていなかったし、音声の発生源はそれだと思えなかった。

「夜は長い。明けるまでにまだ間がある。その時の話をしてあげよ

う。王子と囚われた娘の話だ」

……そんなメルヘンチックな話のどこに僕の出番があるというのだ。

とりあえず飽和状態になった頭に浮かんだのはそんな疑問だった。王ってなんだ王って。まさか僕が王様だったとかいう話だったらオカシイを通り過ぎて気味が悪い。前世がナポレオンだったとかそういう怪しい話なんだろうか。いや、卵が喋っている時点でもうオカルトなんだが。

「案じることはない」

僕が泡を食っているのがどうしてわかったのか知らないが、声は笑いをにじませながら告げた。

「お前はただのしがない小姓であつた。しかも望みのない恋をしていた」

それって踏んだり蹴ったりじゃないか。

そう思ったのを境に、僕の意識はくらりと揺らぎ、床に沈むように座り込んでいた。

むかしむかし、あるところに王様がいました。

お后様は跡継ぎの王子様をお生みになった時に命を落とされていたのですが、王様は再びご結婚もなさらず、王子様が成長なさると共にお二人で王国を治めておいででした。

王様には六人の忠実な大臣、そして公にはされておりませんでしたけれど一人の魔女が仕えておりました。この魔女は歳を数えることも随分前に止めたような老婆でしたが、何時何処から如何して王様の下にやって来たのかも、そして如何様な術を操るのかも、誰も知るものは居りませんでした。

王子様はとても聡明な方で幼い頃から魔法をお修めになり、その時分には教師をも超えた使い手となられていたのですが、その王子様にも、この魔女の術は今となってはほぼ廃れた古代の禁術の流れを引くものらしい、としかお分かりにならなかったのです。

この魔女は確かに王様の命じられたことにはその力を惜しみなく使ったのですが、王子様の直々の命令には従わないことがあります。例えば王子様が十八になられた年に、軍を率いて近隣の遊牧民を征伐に向かったのですが、その時魔女は身体の不調を理由に、天候を操って戦を助けることをしませんでした。勿論、魔女の力など無くとも、王子様は勝利を収め、族長を討ち取り、族長の娘を人質に王様の待つ城に凱旋なさったのです。

さて、戦から帰られた王子様がまずなさったのは、一人の側仕えの小姓に捕らえた娘を魔女の処に連れて行かせることでした。魔女は城の中でも最も高い塔に住んでいたのです。小姓と娘は黙ったまま螺旋階段を長い間上ってゆき、ついに扉の前で佇んでいた魔女に対面しました。

「お初にお目にかかります、世界の理を知る御方」と、娘は丁重に挨拶しました。

「凡てを知っているわけではないよ、美しい娘。ただし他の者よりよく見えるというだけだ」

魔女はそう言うつと、娘だけを部屋に招きいれ、小姓には日没後に再度訪ねてくるよう申しつけました。すらりとした娘は確かに美しく、髪は闇夜のようでしたし、顔はまるでそこに浮かぶ月のようでした。けれど物静かな物腰や伏せられた瞳の中にも、時折激しい焔が過ぎるのを魔女の鋭い目は見て取りました。

「どうしたものだろうね。王子は求婚を受け入れぬお前を獣に変え、罰を与えるつもりだよ。逃がしてやることも出来なくはないが」

「いいえ、逃げることは出来ません」

娘ははっきりと答えました。

「父亡き後は私が族長です。王子は私が留まる限り、私の民に害を加えぬと誓いました。私ひとりが囚われることで民が無事に過ごせるのであれば、従わぬわけには参りません。

それに自分の意を曲げられるよりも、外見の変わることのいかに辛かるうことでしょう」

「考えは変わらないようだね」と魔女は娘の目を覗き込んで言いました。

「それでは好きな獣を選ぶがいい。そしてこれは餞別だよ。王子がいくら頼み込んでも、お前が望まない限りは元のその姿に戻さないことにしよう」

「では鷹に」と娘は微かに笑みを浮かべて答えました。「我らが民の守り神、何者にも束縛されぬ誇り高き空の王に」

ですから日が沈んだ後、塔の部屋にやって来た小姓が見たのは、一羽の美しい鷹でした。魔女は、この鳥が娘の変化した姿だと王子様に告げるように言うと、鷹を受け取って踵を返した小姓に向かって問いかけました。

「お前は妹のことで王子を許したのかい」

小姓は沈黙を守ったままでしたが、一瞬足を止めました。

「そうだろうと思ったよ。復讐したいのなら、次の満月の夜此処までおいで」

答えを聞かずに魔女は扉を音高く閉ざしました。小姓は待っていた王子様の処に真直ぐ向かい、魔女の言葉をそのまま告げたのですが、最後に言われたことについては口を噤んでいました。王子様はお顔こそ少し蒼ざめていらっしやいましたが落ち着いたご様子で話をお聞きになり、受け取った鷹には金の足輪を付けると、特別にお誂えになった金の鳥籠で飼うことになりました。

あくる日から、王子様がこの鷹をご寵愛になっっていることは、城では知らぬ者がありませんでした。王子様はそれまでも一匹の猿を可愛がっていらっしやったのですが、もうその獣には見向きもさ

れず、政務を片付けられた後は鷹を連れて狩りに出掛けられるようになったのです。

やがて月が満ちると、あの小姓は暗闇の中手探りをしながら塔を上っていきました。頂上の部屋に辿り着くと、この世のものとは思われない青味を帯びた光が漏れてくる扉の隙間から、魔女が語りかけたのです。

「お前が大切にしていたものを奪われたように、お前も王子の大切にしているものを奪ってやればいい」

小姓は僅かに身動きしたようでした。

「そう、あの鷹だよ。お前以外はあれの本当の姿を知らないがね。さあ、よく聞き。もうすぐ鷹は卵を産むだろう。お前にその卵を盗んで欲しい。そうすれば、あれは自由になれるだろう。けれど卵を盗むとき鳥籠には触れてはいけないよ。王子以外のものが触れると、直ぐに王子に伝わるよう魔法がかけてあるからね」

魔女がそれだけ言うと、扉の隙間から漏れてくる光は一瞬にして消え、小姓は自分がまた塔の入り口に立っていることに気がつきました。小姓は聳え立つ塔を暫く見上げていましたが、自分の居室に戻ってゆきました。

何日が過ぎて、鷹は本当に卵を一つ産みました。それからというもの王子様は、他の誰をも鷹が居る部屋に近付けようとはなさいませんでした。軍の指揮を執るために、ある日国境までお出掛けになったのです。小姓はその機会を逃さず、部屋に忍び込みました。鷹は考え深げな目で小姓を見つめ、小姓がその尾羽をそっと一本引き抜いたときも、羽ばたきもしなかったのです。

小姓は尾羽を使って、上手く鳥籠の扉を開けました。手を慎重に差し入れて、卵を取り出そうとした時のことです。誰からも忘れ去られていたあの猿が後ろから忍び寄り、急に手に飛び掛って鋭い歯を立てたのです。鳥籠は音を立てて床に落ちました。次の瞬間、雷

鳴の轟くような音とともに王子様が小姓の目の前に現れました。

「裏切ったな、この盗っ人め」

王子様は叫ぶと、剣を抜いて小姓に切り掛かりました。避けきれなかった小姓は崩れ落ちるように倒れましたが、苦しい息の下から王子様に向かって言いました。

「盗みも裏切りも、貴方が私の妹に行ったことだ」

そして小姓は自分から流れる血に身体を浸しながら、最後に鷹を見つめました。

「鷹よ、王子は誓いを破っているのだ」

すると王子が床に落ちた鳥籠を拾い上げるよりも早く、先程よりも大きな音が響き渡ったかと思うと、魔女がやって来たのです。魔女は部屋を一瞥すると溜息をつき、その曲がった指を王子様に突きつけました。

「王との誓約とのおかげで、お前に危害を加えることは出来ないが、覚えておくがいい。お前にはその卵を孵すことはできないし、お前はいつかお前の傲慢さによってその身を滅ぼすだろう」

そして鷹の方に向き直ると言いました。

「その哀れな小姓の言ったことは本当だよ。お前の民はこの国から追われ、今となっては帰る場所もなく彷徨っている。王子がお前に帰る処を残しておくと思ったのかい」

それを聞いた鷹は、鳥籠をお持ちになっていた王子様の手にその鋭い嘴で突き掛かりました。王子様が思わず手を離すと、傾いた鳥籠から卵が落ち、床に当たってぐしゃりと潰れてしまいました。

「失せろ、醜い魔女」と激昂された王子様は叫び、まだ血のついたままの剣を閃かせました。ところが魔女が王子様を見つめただけで足が床に根が生えたように張り付いてしまったのです。

「仰せのままに」と、魔女は勿体ぶって一礼し、卵の殻の破片をゆつくりと拾い集めました。そして轟音を城中に響かせたかと思うと、消え去ったのです。

それからというもの、その魔女の姿を見た者は無かったということです。

「小姓の出番が少ない、と思っっているようだね」

語り終えると声はそう言った。実はその通りだった。

「けれどそれはお前の物語だからね、お前以外には語ることができないのだよ。人はそれぞれ自分の物語を持っている。そしてそれは誰にも干渉することは出来ないのだから」

確かに不思議なのだけれど、話を聞いている間に、僕の脳裏に浮かんできては離れない映像があった。まるでデジャビュのように、どこかの夢で見たように、仄暗い中、永遠に続くように長い階段を誰かと一緒にぐるぐると上っていったことがあるような気がしていた。けれどその誰かの顔は、どんなに集中してみても思い出すことは出来ないのだった。

でもそんなことがあるわけではない、と思う。

「お前には借りを作ってしまったね」

僕の内心の葛藤には構わずに、卵は落ち着き払っているようだった。

「ひとつ教えてあげよう。いつかお前はあの鷹に巡り合うだろう。だが気をおつけ。鳥は自由だ。捕らえられぬものなのだよ。羽を休めると、自分からそう決めない限りはね」

優しいな声を最後に、ぱりぱり、と何かが碎けるような音がした。同時に蛍光灯とはまた違う青い光が辺りを照らし出して、僕は思わず目をつぶった。目蓋の裏に焼きついた光の残像はすぐ消え、その代わりに何かが飛び去っていくような羽ばたきの音が聞こえた、よな気がした。

気がついた時は、僕は床の上に倒れていた。もちろん着替えてもいないし、電気も点けっぱなしだ。思わず自分を哀れんでしまうくらいに疲れっぷりだった。いくら仕事したって残業手当もつかないというのに。

そのあと喉が渴いて仕方なかったので、ふらふらしながら台所まで重い身体を引きずっていった時に、テーブルの上の割れた卵の殻を捨てたのが、その後三日間も風邪で寝込む前の最後の記憶だ。熱が出ている時はおかしな夢を見たりすることがあるが、その夢は特に変だったし、やけにはつきりしていたので、かなりの間記憶に残っていた。

不幸中の幸いは、月曜日には快復して出社できたことだろうか。

そして、鈴木さんちの特Lサイズの卵のことをやっとなんて忘れた頃に、ひょんなことから左薬指を失った女性と出会ったりするのだが、それはまた別の話。

とりあえず、その夜以来、僕はもう卵を見ても盗まなくなった、ということはこの話は終わりにしようと思う。

侍女と真珠の話

私は、牡蠣を食べると、必ず真珠を見つける。

物心ついたところからそうだった。最初はたしか、父へのお歳暮が何かで届いた箱一杯の岩牡蠣を相手にてこずっていた母を手伝ったときだ。私が手に取った途端、無骨かつ堅固な殻は、ナイフをこじ入れるまでもなく、もっと正確に言えば、刃で軽く触れただけで降伏し、ぱっくりと開くと内に守っていた柔い身を晒した。

そして、その身にまた守られるように、一粒の真珠が。

母は喜んだ。私の小指の先ほどのそれを摘んでは、ためつすがめつ見て、あまり価値はないだろうけれど記念に指輪にでもしようか、と言って、小皿にティッシュを敷いた上に乗せた。そうしてから、私たちは二個目の牡蠣へ、それぞれのゴム手袋に覆われた手を伸ばした。同じことの繰り返しだった。母は殻をこじあげることができず、私の掌の上にはまるで継ぎ目がバターで出来ているかのように容易く開いた殻、そしてその中の一粒の真珠。

「もしかして真珠用に養殖された牡蠣が紛れ込んだのかな？」
気を取り直した母はそう言って、残りの牡蠣を私に任せた。真珠の有無にかかわらず、どうも贋目に見ても私の方が殻を開けるのが巧みだったからだ。

結果、小皿の上には、形も色もさまざまな真珠が十三個並ぶことになった。

通常であれば、牡蠣という海の珍味を食するということが、その日の食卓を席巻する話題となったことだろう。もしくは、いか

にその殻を開けることが重労働であつたかについて作業従事者たる母と私が語り、それ以外の家族のメンバーがそれを拝聴するということであつたかもしれない。

けれど、その日、家族が夕食を囲んだ際に話されたことといえば、真珠のこと。そしてそれに付随して、ほんのわずかに、私の牡蠣の殻開けの技巧が持ち出された。

母は戸惑いを隠そうとして、ことさら陽気に喋った。これだけの半端な数の真珠で何をしようとか、牡蠣の送り主に返したほうがいいんじゃないとか、業者が真珠養殖用のものを間違えて送つたのではないとか、それにしてもこんなに異なる色の真珠が同じ場所で作られるなんて有り得ないんじゃないとか、そういった内容のことを。

食卓の中央、小皿に載せられたまま、十三個の真珠はにじむような光を弾いていた。

どうして十三個か、というのもまた不思議だった。送られてきた牡蠣の数は一ダースだったのだが、最後に開けた一番大きなものに双子の真珠が入っていたのだ。その数は、私に何か不吉なものを感じさせた。

その予感が決定付けられたのは、喉が乾いて夜中に起き出したときだった。階段の踊り場まで降りてゆくと、まだ起きていた母の声が聞こえてきた。

「返したほうがいいのかしらね」

あの真珠のことだ、と本能的に悟って、私は立ち止まった。父の返事は、ドアに隔てられてくぐもり、はっきりと聞こえなかった。それに引き換え、母の声はよく通る。

「じゃあやめときましようか。それにしても……なんだが、ちょっと気持ち悪いわね」

だから、私は次に真珠を嚼んだとき、誰にも言わなかった。

それは、殻のついたものではなく、剥き身といっても生食用ですらなく、鍋の具材としてよく煮込まれた牡蠣だった。

私は、火傷しないくらいに冷めたそれを自分の取り皿から口に運び、そして奥歯で何か固い物を思い切り噛みしめる羽目になった。

幸い鍋をつついていた誰もが私の異状に気づかなかったので、私は秘密裏にその異物を吐き出し、検分した。

真珠だった。

この前の十三個のうちのどれよりも大きく、また真円に近かった。しかしその表面には、私の歯型がくつきりと、まるで刻んだかのように残っていた。私は慌ててそれをポケットにねじこむと、その夜は牡蠣以外の具しか食べなかった。

それ以来、私は牡蠣をできるだけ食べないようにしている。

偶に、本当に稀に、誰にも見咎められないときに、運試しのような気持ちで一つだけ挑戦してみる。岩牡蠣をはじめ、牡蠣フライ、牡蠣のマリネ、牡蠣のグラタン、缶詰にされている牡蠣。

すべて当たりだった。どんな調理方法をされていても、私が食べた牡蠣はその身に真珠をひそませていた。

こんなのは普通ではない。常識ではありえないのだ。宝くじで一等を引き当てる確率というよりも、サハラ砂漠で一本の針を見つけ出すという蓋然性にずっと近い。宝飾品売り場ではお馴染みの、柔らかな光を抱いたまるやかな球体も、この目には禍々しく映る。

母は、時々思い出したように、最初の岩牡蠣の思い出をさもおかしそうに語ることがある。母にとっては、あれは原因も分からないままに済まされた、もう過去に属する笑い話なのだ。しかし、私にとってはそうではない。

どう処理するか決めかねて、ジャムの空き瓶にずっと色も形もさまざまの真珠をためていたが、もうすぐそれも満杯になる。

「その娘」

ハイヒールで靴音を地下鉄の駅から続く階段に響かせながら上り、人通りの少ない道に出た途端に声がした。私はコートの襟をかきよせると、進行方向に広がる暗がりを目を凝らした。海からの風が吹く通りには誰の姿も見えない。

「そのの、灰色の一つボタンのスーツの上にベージュのトレンチコート」を羽織り、そのポケットに真珠を隠し持っている娘」

得体の知れない声はさらに続けて言った。微かな震えが背筋を伝って爪先へと下りた。ただ、本当に奇妙なことに、私はその声に安堵感をおぼえたのだった。形容するならば、ずっと無意識のうちに待ちわびていた何かが、ふいに眼前に姿をあらわしたような。

かつん、と微かな硬質の音とともに、何歩か先の道路脇に灯りが点けられた。ぼんやりと照らし出されたのは、小さな机と、それを前にして同じくこじんまり座った老婆の姿だった。

「お前に助言をひとつしてやろうよ。お代はその真珠で構わない」自分の意に反して足が動き、私の身体をふらふらと老婆の前に進ませた。確かに私は恒例の運試しをして、またしても牡蠣から真珠を取り出したところだった。しかし、今夜食べた牡蠣の数は一つではなかった。

「許婚に連れられていった店で、断りきれずに口にした牡蠣から出てきた薔薇色の粒揃いの真珠が四つ」

老婆はカードを伏せて並べながらゆったりと告げた。私はぎこちない動作で、机を隔てて彼女の真向かいにある椅子に座った。口の中がからからに乾いていた。顔の近くにあるランプが眩しくて、目を眇めなくてはならなかった。

「お前はそれを許婚から隠したね。あの男は良い人間だ、しかしお前の感情は何かにつ掛かっている。自分でも突き止められない、思い出せない記憶のせいで躊躇している。最後の一步が踏み出せないのはそのせいだ」

「ど、うして」

こちらの様子を窺いもせず、に紡がれた言葉に対して、私は必死で下顎にへばりつく舌を動かそうとした。みつともなく掠れた声に老婆はようやく顔を上げた。凧いだ夜の海のように暗く、深さの測れない眼が私を射抜いた。

机上のカードはいつの間にか表に返されていた。三枚の図柄は左から順に、魔女、王子、そして。

「どうして知っているのかって？ 私はお前のことならもっと知っているよ……盗っ人、裏切り者、そして誓いを守った侍女」

むかしむかし、あるところに王様がいました。そしてお世継ぎの王子様が。

この王子様が生まれになったとき、それと引き換えのようにお后様は命を落とされたのですが、それでも王子様は日々健やかに、美しく、賢く成長なさいました。なにしろ王子様の狩りの腕前ときたら国中のどの獵師よりも優れたものでしたし、見目の麗しさは絵姿に写し取ることを画家が諦めるほど、そしてご幼少のみぎりよりすべての教師を合わせた以上にご聡明でいらっしゃったのです。そんなわけで、王子様はついには魔法まで修め、成人されたあかつきには、王様の片腕として見事に国を統治されるだろうと言われておりました。

ところで、王様には一人の魔女が仕えておりました。この魔女は、すべての魔女がそうであるように、誰もが顔を反けるほど醜く忌まわしい老婆ではありませんが、誰もが思い出せないほど古くから、城で一番高い塔に住んでいたのです。魔女の力は強大で、その意に反したら恐ろしい咎を受けるとは曰われていたものの、王以外は一人として、その禍々しい力がふるわれるのを眼にしたことはありませんでした。そして魔女は、誰からも己の手の内を隠しておりまし

て、王子様が魔女に本を一冊所望されたときでさえ、不躰にも断り文句を扉越しに投げつけたただけでした。

ところがある日、既に教師を超えた魔法使いとなっていた王子様が、王様への御誕生日の贈りものとして、魔法の鎧を造っていらっしやったときの事です。突然、魔女が断りもなく王子様の部屋に現れたかと思うと、目にも眩い黄金の鎧を一瞥すると、軽蔑したように言いました。

「これでは、王は無事に齢を重ねることはできまい」
そして、指を鳴らすと、鎧を一瞬にして塵へと変えてしまったのです。

王子様は魔女の無礼な行いに憤られました、相手にするのも馬鹿らしいことです。次に魔法の冠を造られることにしました。黄金に宝石を散りばめたそれが、ほぼ完成間近になったとき、またしても魔女が現れました。

「またしても、王は無事に齢を重ねることはできまい」
眩くなり、魔女はまた指を鳴らしました。そして冠は塵となってしまったのです。

王子様はいつそ魔女を切り殺してやろうかと思いましたが、あくまでも魔女は王様の配下であることから、耐え忍ばれました。そして次に、魔法の剣を造られることにしたのです。きらびやかなそれが、あとは祝賀の席において王様に献上されるだけとなったとき、魔女があらわれ眩きました。

「どうやっても、王は無事に齢を重ねることはできまい」
言葉とともに魔女は指を鳴らし、魔法の剣は、その前の二つと同じように、一握りの塵となりました。

王子様は、ついに魔女を排する決意を固められました。これまでの無礼な行いは勿論、恐れ多くも王様の余命の短さを三度にわたって仄めかしているのです。このまま魔女をのさばらせておけば、王様の命が絶たれてしまうことは明らかなことでした。

城の中では、王様でさえも塔の天辺にある魔女の部屋に足を踏み入れたことはなかったのですが、ほんの一人だけ、年若い侍女が魔女の側仕えとしてその部屋に入ることを許されておりました。侍女の兄は王子の小姓、侍女の母は王子様の乳母でした。つまり侍女と王子様とは乳兄妹だったのです。

そこで王子様は侍女を呼び出すと、沈黙を誓わせたうえで、魔女の恐ろしい企てについて侍女に言い含めました。そして、王様をお助けするために、魔女の本を一冊盗ませることを約束させたのです。

翌日は、王様の御誕生日でした。祝賀の晩餐会には、王子様をはじめ、六人の大臣、十二人の副大臣、数多くの貴族達、そして魔女が列席していました。王様は、招かれた客が一人、また一人と、祝辞を述べるのに耳を傾けられ、それぞれの贈りものを受け取られました。ついに、王様のご健康を祝って、皆が乾杯することになったときです。末席についていた魔女が目をぎらぎらと輝かせて立ち上がりました。

「お待ちください、我が君」

「どうしたのだね？」と王様がお尋ねになりました。

「ほんの少しお時間を頂けませんか」と魔女は繰り返しました。

「勿論のこと、魔女よ、貴方から与えられるものはすべて謹んで受け取る心積もりでいる」

王様が鷹揚に頷かれると、魔女は側に控えていた侍女に向かって小声で問い質しました。

「あの本をどこにやった？」

「持っておりません」

侍女は震える声で答えました。それは本当のことでした。魔女の部屋から持ち出し、侍女が自分の枕の中に隠しておいた本は、いつの間にか失くなっていたのです。

「王子だね」

魔女は曲がった指を侍女に突きつけました。侍女は沈黙を守り、ただ首をかすかに振りました。何が起こっているのかわからない出席者たちがざわめき始める中、魔女は侍女を束の間じっと見つめたまま、苛立たしげに吐き捨てました。

「お前は私を裏切った。口を閉ざし、貝になりたいというならそうしてやろう」

魔女の呪詛に、侍女は何かを言おうとして口を開きました。

ところが、侍女の口から零れて出てきたのは、言葉ではなく、一粒の真珠だったのです。侍女は慌てて、両手で口元を押さえました。けれども、侍女が何か意味の通る言葉を発しようと試みるたびに、その唇からは声の代わりに真珠が溢れ出たのです。

侍女は絶望した眼で晚餐の席を眺め渡すと、くるりと踵を返して大広間から逃げ出していきました。侍女が走った後には、幾つもの真珠が転がっておりました。

幸い、遠く離れた王座に掛けておられた王様のお耳には、この騒ぎはしかとは届きませんでした。ですから、魔女がこんな提案をしたとき、王様は即座に頷かれたのです。

「我が君、その盃を頂けませんか。その返礼として、私の心よりの贈りものを捧げましょう」

魔女の言葉を聞いて、王子様は王様を止めようとなさいました。しかし、王子様が手を伸ばされるより早く、王様の盃は宙を飛び、魔女の元にまでやってきました。

魔女は一礼すると、目の前に浮かぶクリスタルの盃を掲げ、老婆とは思えないほど朗々とした声で述べました。

「王様にご健康を！そして、今一度の誓約を」

盃は一瞬にして砕け散りました。白いテーブルクロスに、赤いワインが血のように染みしました。

そして、王様の御誕生日の祝賀は、それから三日三晩の間続きました。

その間に、侍女は塔から身を投げました。

「それで、お前は何を願ったんだね？」

老婆の小さい体軀は、語り終えたとさらに縮んだように見えた。けれど鋭い眼力は変わらないまま、私の表情から考えを探ろうとしている。私は顔を背けると空を見上げた。満月にわずかに足りない月が、雲に隠れたかと思うと、また現れた。

「あの王子は、何かを叶えると言った筈だ」

「お分かりになりませんか」

予想以上に平静な声で、私は受け答えをすることができた。風向きが変わったのだろう、潮騒が間近に聞こえてきた。風が強くなってきたというのに、机上のカードが煽られて動く様子はなかった。「見当はつく。後で聞こうと思っていた。しかしお前は自害した、浅はかにも」

ええ、と私は吐息だけで肯定した。当然のように、奇妙なお伽噺を自分のものとして甘受することに何の躊躇いも感じなかった。私は侍女で、老婆は魔女だった。そして私は一時の激情に身を任せて、老婆を裏切ったのだった。

「最初から叶うことのない恋だった。お前だってそれは知っていたろう。水面の月を掬おうとするような、空高く飛ぶ鳥を地に繋ごうとするような。そんな不相応の願いに身を焦がすほど、お前は馬鹿な娘ではなかった」

「そんな馬鹿な娘だったのかもしれない」

「いいや、そんなはずはない」

老婆は強く否定すると、深淵のような眼で私を覗き込んだ。

「お前を選んだのは私だ。見ていたよ。物静かで礼儀を弁えた、落ち着いた物腰の侍女。その年頃にしては稀な、自分の世界を己の殻

に無理なく閉じ込めた若い娘。甘い言葉や、外面だけのまやかしにお前が騙されたわけがない」

「貴方は、いえ、きつと誰もが、私を軽蔑するでしょう」

私は唇を弓なりにした。たとえ歪んだものでも、笑顔を作ろうと意識した。

「告げるくらいなら、私は貝になりたかった」

「真珠は、貝がその身を守るために作るものだよ」

もう吐き出してしまうがいい、と魔女は言うのを聞いて、私は気づいた。地下通路の出口で立ち尽くしていたときに感じたあの衝動、待ち焦がれていた何かとは、この機会なのだと。私は唾を飲み込むと、広げられたカードの図柄を見つめた。高慢な王子と愚鈍な侍女。「……あのひとが私に叶えてくれるといったことと、私の願いは違うんです」

唇の端が引き攣れた。

「あのひとは、幸せにしてくれると言った」

そして私は、とやつのことで絞りだした。

「私がもしも死んだら、一度だけ、私のために泣いて欲しかった」
どうか、その涙を一粒だけでも、私のために零してください。
「それで充分でした」

瞼が熱を持って、眦が濡れるのがわかった。何て乙女趣味の愚かな願いだろう、と自嘲しながら瞬くと、溢れた液体が頬を滑り、顎の先から滴り落ちた。ところが膝の上に落ちてきたものは、またもや真珠だったので、私は泣きながら笑ってしまった。

「その願いは叶わないよ」

「知っています」

ぼろぼろと真珠を落としながら、私は言った。

「私は、僅かな間でしたが、本当に光栄なことに、貴方の弟子でした。王子が王を弑そうとしていることも、貴方が王を護ろうとして

いたことも、王子が私が何をしたらとって心を動かすこともないことも知っていた。それなのに」

「なんだい、お前はあれ以来泣いてなかったのかい」

魔女は呆れたように眉を顰めた。それだけで、私は頷くだけで精一杯になってしまい、次の語句を口にするまで、さらに数粒の真珠を零す羽目になった。

「助言をひとつしてくださると、仰いましたね」

「言ったとも」

私の世界は奇麗に閉ざされていた。誰のせいでもない、私のせいで。しかし、ひとりで居られるということ、孤独を好むということ、はけしてイコールではない。

「助けて、いただけませんか」

私は――盗つ人で、裏切り者で、誓いを守った愚かな侍女は、顔を上げて、魔女に頼んだ。

「あのひとに、さようならと告げるのを」

あんなに無残な願いをしてしまった理由は、恋でも愛でもなかったのかもしれない、ただ寂しかっただけかもしれない。でもそれだけを一生懸命抱えていた。忘れてしまっても、傷が癒えないようにしていた。私は諦められなかった。

返答を待つまでもなく、私は眼を瞑ると、これが最後、と自分に言い聞かせて、閉ざしていた記憶を開放した。振り返るのは、もうこれっきり。これ以上は心を痛めることもなく、傷ついた理由を思い出しもせず、痕が薄れてゆくに任せる、と。

「……ローズマリーが香っている庭園で、あのひとは緑の服を着ていて」

呼び出された私が近づいてくるのに気が付くと、振り返った。覚えのある匂いが鼻腔をくすぐった。蜂が羽音を立てて、花から花へと飛び回っていた。

「あのひとは青い目をしていた」

眺められた相手がいたたまれなくなるほど奇麗な色だった。それ

はきつと何も映していなかったからだ。あんなに空虚な人を私は見たことがなかった。碧眼の中にはぞつとするほど何も無くて、それでいて、何かを怖ろしいほどの吸引力でひたすらに求めていた。あの渦に、私は知らぬ間に巻き込まれてしまっていたのだ。

記憶によつて蘇った、香草の生い茂る庭で私はその眼を見なかった。景色を締め出すように目を閉じると、自分だけがしがみついていた言葉を発するために口を開いた。また、真珠が溢れるかと思っていたのだが、予想に反して、私の耳は、自分自身の声が別れを告げるのを聞いた。

「もうそろそろいいだろう。とんだ茶番に付き合わされたよ」

はつとして眼を見開くと、老婆が皺だらけの手でカードを揃えているところだった。夜も更けて、身を切るような風が通りを吹きすぎていく。月は分厚い雲の中に姿を消していた。その代わり、先程まで点いていなかった街灯の明かりが、道の両側に等間隔で並んでいた。人工の光に照らされると、老婆はただの路上の古い師としか見えなかった。

「しかし、どんなに愚かでも、弟子は弟子だ。幸せになるといいけれど、そうやって私を見やって、にやりと笑った様は魔女でしか有り得ないのだった。私は立ち上がると、老婆に深くお辞儀をした。それだけでは足りず、魔女を抱きしめたいような気がした。躊躇っているうちに、魔女は、最初と同じく、かつり、という音を立てて、ランプを消した。途端に、彼女の立っていた一角に闇が落ちる。そして、こんな言葉が聞こえてきた。

「涙は真珠に、真珠は言葉に
言葉は世界に、世界は卵に」

闇がぶわりと膨らみ、力強く羽ばたいた。
雲の切れ間から瞬く星へと向かい、真直ぐにその何かが飛び去っ

て行く。見えない存在を追いかけて、私はしばらく夜空を見上げたが、首が痛くなってきたので頭を元の位置に戻した。いつもと変わらない、通勤路が目の前に広がっている。

ふと思い立って、コートのポケットを探ると、夕食の際に確かに入れた薔薇色の真珠が四粒ともなくなっていた。それ以外にも、周囲を見回してみても、先刻ぼろぼろと零したはずの涙の代用品の姿も形も見えない。

昔から、魔女が言葉を違えたことはなかった。

思い出して、笑おうとしたのに瞼が熱くなって、私は自分が失敗したことを悟った。両眼から流れ出て、頬を伝い、顎の先で合流して、重力に負けて落ちる。涙がその先の掌を濡らすにあたって、私は自分が侍女としての記憶を失いゆくことを知った。まるで墓碑銘が雨風に洗われて薄れるように、まるで目覚めた後に夢を思い出せないように。

それが私には必要だった。遠い昔の記憶から解放され、わだかまりなく幸せな花嫁になるためには。

それが魔女からの贈りものだった。遠い昔に己を裏切り、その代償に呪いに囚れた弟子に対しての。

私はぼろぼろと涙を零しつつ、せめて帰ったら、瓶の中に真珠がまだあるか確かめようと思った。そして、家路を辿りつつ、年経た優しい魔女について願った。なるべく困難に立ち向かわずに済むように、もう裏切られることがないように、少しでも彼女の物語が幸せであるように。それだけしか、できることはなかった。

もう、私は、牡蠣の中に真珠を見つけないだろう。

侍女の物語は、終わったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1868q/>

王様の鷹の話

2011年11月16日14時25分発行